

「自称元海軍飛行予備生徒」鶴田浩二への抗議人たち

プライド高き「同期の桜」たちが騒ぎはじめた「特攻生き残り」俳優への疑問

♪貴様とオレとは……実はカンケイないんだ、と怒っているのである。怒りのマトになっているのは、散華した「同期の桜」に思いをはせて歌ったり、スクリーンで悲しみの表情を見せる、ご存知「特攻生き残りの俳優」鶴田浩二。彼は同期でないというわけである。戦後——というのも、もうはるかな29年を経て、怒っているのは、今はシラガ頭、まごうことなきホンモノの元海軍予備学生たち。さて……。

「軍歴詐称者・鶴田浩二を糾弾する会」というほど大げさなものではないが、ちょいとした、そんな雰囲気になってしまった。たまたま問題のテレビ放送があった翌日の2月15日夜、東京・渋谷で開かれた元帝国海軍出身者の親睦会「ネイヴィ・クラブ創立10周年記念特別例会」でのこと。

——約80人の海軍サンのほかに、どういうわけか、若い女性会員の数もチラホラ。このあたりが「粋」といわれた海軍サンらしい。もっとも「遺物」となった海軍士官第一正装に身を包んだ白髪頭の「老兵」が、ミニスカートやパンタロン姿の女性の間をカイくぐり、大マジメの表情で直立不動の最敬礼をするサマ、「粋な海軍サン」というより一種異様なムードではあった。

その会が頂点に達したのは、万雷の拍手に迎えられた特別会員の歌手、藤山一郎が登場した時だった。ニコヤカにマイクを持った藤山さんは、ぶった。

「昨日、デタラメな軍歴をいってテレビに出て歌った役者がいるそうですが、軍歴詐称は大変なことです。私は正真正銘の海軍軍人。第二南遣艦隊司令報道班。セの四二・セの二四（所属番号）の藤山一郎と申します」

あの温厚な顔が、この時ばかりはキリリと締って男っぽい目つき、顔つき。この軍隊口調の自己紹介で会場は爆発的に湧いた。すでに会員の報告で、鶴田浩二の「軍歴詐称」を知らされていた海軍サンたちは、ヤンヤとわめいた。「セの四二・セの二四？ こりゃホンモノだ！ あいつとは違うな！」「異議なし！」

もちろん、藤山サンとしては、仲間たちの親睦会という気易さもあり、軽い気持ちで吐いた言葉であろうが、それにしても「デタラメをいった役者」に対する「義憤」のスゴイこと……。

テレビ出演を怒る「同期の桜」

鶴田浩二の「軍歴詐称」が話題になった直接のきっかけは、2月14日、よみうりテレビから放映され『帰って来た歌謡曲・鶴田浩二・戦友よ安らかに』という番組でのこと。「元海軍少尉小野栄一こと鶴田浩二」が、太平洋戦争で特攻隊として死んでいった戦友に歌を

捧げ、一緒に出演した6人の「同期の桜」と当時の思い出話をする、という番組である。亡き戦友に対する切々たる思いを込めて、お得意の軍歌を披露する鶴田浩二は、いかにも「元海軍少尉」然としていた。リッパに見えた。第一、相変わらずの力演、熱演。

が、その日の番組でひっさげた軍歴がいけなかった。「海軍飛行予備生徒第1期生」という肩書。運悪く(?)、第1期海軍飛行専修予備生徒だった、かつての海軍士官たちが、そのテレビ番組を見ていたのである。

翌日、第1期海軍飛行専修予備生徒の親睦会である「一生会」の事務局(東京・大手町、貿易会館内)には抗議の電話が殺到したというわけである。一生会幹事長のA氏(東京貿易会館取締役)は、チャンと折り目正しく怒っちゃってる感じで、

「だいたい、我々第1期飛行専修予備生徒の名簿には彼の名前はありません。デタラメですよ。鶴田がウソ偽りをついて、いかにも一生会のメンバーであるがごとく、しかもテレビなどに出演するのは、英霊を冒トクしていることですよ」

相当、興奮状態にあるとみえて、この時、たまたまかかってきた電話の受話器をサカサマにして話していて、しばらく気がつかなかった。もちろん、激怒しているのはA氏だけではない。やはり一生会のメンバーである剣道7段の猛者、専修大学法学部・B教授も、「全く私も、鶴田クンがどうしてあんなウソをつくのかわからん。1期予備生徒でもない男に、1期予備生徒を名乗られては、我々のプライドが許しません。大いに傷つけられています」が、その怒りは鶴田浩二とテレビ番組に一緒に出演したホンモノの「同期の桜」にも向けられて

「あの6人の中の一人は第1期出身で、あとは第14期のメンバーです。第14期の連中のことはさておいて、我々と同期でありながら、出演したCはいかん。除名モンだよ。

それにしても、テレビに出たあの連中のデレーツとした顔、いったい何だ。あれが海軍の飛行機乗りか! そう思われたのではこっちが迷惑だ。奴ら気合が抜けとるよ。あの最後に歌った「同期の桜」の歌いかたときたらどうだ。あれは海軍予備生徒のツラではない!」(A氏) かわいそうに、この剣幕でガ鳴られたんでは、さぞかしテレビ出演した「同期の桜」も恐れをなすのでは、と同情したら、案の定、「除名モン」のC氏(トヨタレンタカー近畿取締役)、聞き取りにくい声で

「あのことはノーコメントです。ワシは組織(一生会大阪支部)の指令で出たのですから……」

鶴田のためにも一発やらにや

もちろん、軍人魂を戦後もずっと引きずったような調子で、激越する人ばかりではない。もの静かな口調で言葉を選び選び語るのは、しごく平和な風貌をしているD氏(秀英出版取締役)。

「私はね、あの人を悪くいうのは気の毒なんです。鶴田さんは軍歴を詐称しているのは確かですし、第1期予備生徒を名乗るのはやめていただきたいとは思ってますがね。こんな、生チョコロイことをいったら同期の連中に怒られるかもしれませんね」

と、まあ「タカ派」「ハト派」の区別はあっても、だから一生会の総意としては鶴田浩

二許すまじ、の空気が強いことは強いのだ。

で、ついに一生会定例懇談会（2月19日）で、以下のごとく決定――。

一ッ。今までの詐称については不問に付す。

一ッ。今後いっさい第1期海軍飛行専修予備生徒を名乗らぬこと。

一ッ。但し、鶴田自身のためにも、ここらで一発やらなけりゃイカン。

一ッ。であるから正式に文書で抗議すること。

――以上。

前代未聞の抗議文をつきつけられるハメになった……。もっとも、鶴田浩二が一生会出身を名乗ったところで、関係のないものにとっては大した問題ではない。が、彼は少なくとも「特攻隊生き残りの俳優」として喧伝されていたし、セツセツとして歌う「同期の桜」も、数々の「特攻隊映画」も、彼のナマの経験から絞り出されているにちがいない、と、みんな感じ入っていた。さすがに役者といったらいいのか……。

ところで、第1期海軍飛行専修予備生徒とは、昭和18¹年10月、旧制高校、専門学校在学中に学徒動員された若者のうち、海軍の飛行科を志願し、試験に合格した者に与えられた総称である。鶴田浩二が、テレビで「公言」（司会者がいったことで本人は黙っていたが）しているように、海軍飛行専修予備生徒第1期生であるとしたならば、厚生省復員局にある当時の軍籍簿に記載されているはずだが、残念ながら見当たらない。

しかも、鶴田浩二の「戦況」いちじるしく不利な話はさらにあって、

「以前は第14期海軍予備学生（昭和18年、大学学部在学中に動員を受け、海軍を志願した者に対する呼称）と公言していたのですからね。ある時、14期の中でも問題になって、14期の方から「鶴田の身柄を第1期の方で預かってくれ、なんていうアホな話もあつたくらいなんです」とAさん。

ソバ屋にも入らぬ海軍士官だ

第14期海軍予備学生出身の集まりである「十四期会」のE本部代表幹事（明治大学校友課長）もアキレ気味に次のようにいう。

「今度は第1期といっているのですか？ 彼は以前までは14期出身だと自称してましたがね。でも、ある意味では鶴田くんは本当の14期出身以上に熱心でしてね。実は、14期の戦没者のための慰霊塔が高野山にあるのですが、彼は毎年、その慰霊法要に参加してますよ。それを思うと我々14期会としても、彼の軍歴を深くは追求しにくかったんですが……。ウーン。困ったもんですな」

しかし、鶴田浩二の母校、関西大学校友新聞『関大』（48年11月15日）の対談でも、『芸能界入りの動機は）ひとことにいえば生きてゆけなかったからです。ぼくは関大の専門部1年で海軍予備学生を志願したんです。14期予備学生でした。やっと操縦桿を握れるようになり出撃という直前に日本は破れました……』と、はっきりと14期生を言明していたことは確かではある。

¹ 昭和18年は入試に失敗しているので学生、生徒ではなかった。昭和19年4月専門部に入学。

ただ、ここでいえることは、鶴田浩二の「軍歴詐称」が、海軍だったから目立ちすぎたのかもしれない。怒りの声が渦巻くのも誇り高き海軍サンだから、ホンモノたちがコッチンときたふしもある。「同期の桜」が代名詞になるほど海軍、とりわけ飛行専修要員の同期意識とプライドの高さは、とても部外者には想像もつかない。

戦後 29 年を経た現在でも、「海軍讃歌」となると、ミナサン、一ひぎも二ひぎも乗り出して熱っぽくなってしまふ。軍国主義者ということではないのだろうが、ただやたらに懐かしがり、幾分胸をそらし、例えば、今は大学の教授である B さんも、

「我々は、陸軍の見習士官なんぞとはちょっと違っていたね。海軍士官として、あの短剣をつけたら、オデン屋やソバ屋などには決して入れなかったもんですよ」海軍軍人としての雰囲気、おのずと場所を選んでしまうというのだ。

「日本海軍最後の搭乗員としてのプライドもある。ボクは戦後イギリスに留学したのですが、その時も「オレは海軍の飛行機乗りだった」と堂々といったもんです。もちろん今でも、海軍士官としての誇りはありますよ」そのくらいプライドが高いから、同じ海軍でありながら、いわゆる水兵クラスに対しては、ちょっぴり見くだしてしまうものもいた、ということなのか。なにしろ、ソバ屋にも入らない人たちだ。

「そりゃ、我々飛行機乗りはカッコよかったよ。あの純白のマフラーを首に巻いて整備兵に命令をくださるのですからね。ガンルーム（海軍飛行士官室）の中でも我々が入っていくと、例え上官の整備士官であっても、相手は起立したもんです。食事から何から、待遇はまるで別格でしたからね。飛行機乗りはあこがれの的でした」と、遠い空を見詰めるようにつぶやく元海軍さんも見かけた。

で、鶴田浩二もその「見下された一人」ではないかという説がある。少なくとも一生会ではそう思っている人もあって、A さんがいう。

「ウン、我々の仲間ですって定説となっているのは、鶴田は大井航空隊の整備兵。いわゆる水兵、といわれてますな。その鶴田が、やがて戦争が終わって映画に入り、特攻隊の役をやったりしているうち、だんだん飛行機乗りと思うようになったのじゃないですか……」

であるからして、プライド高き海軍サンは鶴田浩二を許せなくなってしまうのか。「水兵ごときが……」という思いなきにしもあらず……。

同じ学徒出陣の仲間でないか

帝国海軍は、連合艦隊司令長官から一水兵に至るまで、深い「友情に結ばれていた」という評価は、ちょっと待った方がいいらしい。

しかし、鶴田浩二は、飛行機乗りではなかったかもしれないが、確かに海軍の学徒軍人だったことはまぎれもない事実であって、その事実を踏まえていうならば、飛行機乗りだろうが、水兵だろうが、どっちでもいいことではないか、とも思える。事実、

「私は鶴田の親友だからというわけではありませんが、鶴田も私も、そして鶴田に抗議をするという一生会の人も、あの雨の神宮で学徒出陣し、ペンを捨てて一緒に海軍に入った仲間じゃないですか。1 期であろうとなかろうと、飛行機乗りであろうとなかろうと海軍の同期の桜であることには違いはありません。戦争という大きな力によって傷ついた同じ世代

じゃないですか」(第14期海軍予備学生出身、F氏)と、モノわりのよい人もいないわけではないのだ。

さて、「憂国の士」を任じる本人には、いささか不本意なレッテルをはられた当の鶴田浩二は、風邪とかで、声をセキ込ませながら、トウトウと一席――。

「ボクはですよ。1期だとも14期だとも一度も申しちゃいませんやね。もし抗議なさるとすれば、よみうりテレビにすればいい。ボクはあずかり知らないことですよ。

ボクは19年5月に竹山に入団したんです。横須賀第二海兵団ですねえ。そこから飛行機を志願したのですが、6回試験に落ちました。で、家庭が複雑だったのと、軍事教練の認定が遅くなったことで、あっちこっちタライ回しされました。ネイヴィでは村八分ではみ出し野郎だったんです。え、ボク？ ボクは第2期予備生徒……と思いましたねえ。でも、飛行専修ではありませんよ。

でも、そんなこと問題ではないでしょう。ボクらはくたばりそこないです。そのボクらが今どうしたらいいのか。あとに残った者としては、再び帰らぬ者に報いることができるかを考えるべきですよ。一番いいのは、各人のメリットを役立てて、遺族を励まし、死んでいった戦友を慰霊することですよ。

ボクは6年前から年に3回チャリティーショー²をやり、その金を日本遺族会に持って行ってます。飛行機乗りは遺骨を探そうと思っても不可能です。せめて、南方に放置してある遺骨を収集して慰霊するのが我々の急務でしょう。そうでしょう。1期だとか飛行専修だとか、いつまでもケツの穴の小さいことじやいかんじゃないですか。

要するに大切なのは、かつての学生軍人として現在、誰が何をしているか、ということです。ボクはインチキなんかいったことありません。第2期予備生徒として海軍にいたのですよ」

「ケツの穴の小さい」などといわれたら、エリート意識の強い海軍サンたち、また目ン玉ひんむくかもしれない。が、しかし、こういったセンサクが「青春の思い出」の段階で行われているぶんにはいいが、あまりムキになってやられると、今度は「軍国主義アレルギー」のムキから、神経質な「抗議」が出てきそうだ。

² 大きなものがS46. 11. 22に新宿厚生年金会館で開かれた「リサイタル」である。